

ノディエの諷刺的コント：

«dériseur sensé» と反ユートピアを巡る一考察

藤 田 友 尚

はじめに

2000年、フランス国立図書館が中心となって『ユートピア』と銘打った展覧会が開催され、367ページに及ぶ大部な目録が作成された¹⁾。その巻末にユートピア文学関連文献一覧表が付されており、スウィフトの『ガリヴァー旅行記』やメルシエの『西暦2400年』などのユートピア小説はもとより、コンドルセの『人間精神進歩史』やヴォルネの『廃墟』といった文明論、さらにサン＝シモンやフーリエなどの社会思想分野の評論などを含め500点あまりが網羅されている。そしてノディエのコントもそこに名を連ねている。1833年に『パリ評論』に発表された「ユルリュビエール国の偉大なるマニファファ、ユルリュブル、あるいは自己完成能力」（8月）、その続編の「学問島のパタゴニア人たちのアルシカン、レヴィアタン・ル・ロン、あるいはユルリュブルの続編となる自己完成能力」（11月）、そして「トリダス＝ナフェ＝テオプロム・ド・カウチューーによる、風変わりな産業的なパラゲ＝ルーの旅、ならびに南半球の輪廻転生」（1836年）である。これら3作は、1961年にカステクスによって編纂されたノディエ『コント集』のなかで、「分別をもって嘲笑

1) *Utopie : La quête de la société idéale en Occident*, Paris, Bibliothèque nationale de France / Fayard, 2000, pp.357-362.

する者の作品群 (Le cycle du dériseur sensé)』²⁾ という名称の下にまとめられた。

1830年代は紛れもなくノディエの作家人生のなかで最も多産な時期だった。彼の名を後世に残す主要な幻想コントを執筆するかたわら、それと並行してジャーナリストとしての活動も精力的におこない、『ル・タン』『パリ評論』などの有力誌におびたしい数の評論を寄せている。そのような評論のなかでノディエは、フランス革命後の社会の変化を牽引する進歩の概念や文明といった思想に対して、独自の主張を展開している。「分別をもって嘲笑する者 (dériseur sensé)」とはしたがって、ユートピア的コントのみに適応される命名ではなく、同時期に発表された一連の文明評論と通底する問題意識を含め表現したものと考えるべきだろう。それはつまり、「分別をもって嘲笑する者」という表現は、思想史的次元と文学的次元との二層構造をもってノディエの文学的特質が言い表わされていると捉えるべきことなのである。

では、「分別をもって嘲笑する者」という表現が、創造原理としてどのようにユートピア思想とその文学表現に対する独自の価値観を表出しているのだろうか。その点を、本論考では、ユートピア世界の樹立を支える当時の思想史的文脈を考慮しながら、前述した思想史的次元と文学的次元の二層構造に呼応する問題を取り出して考えてみたい。すなわち、1) ノディエのテキストに執拗に繰り返される「自己完成能力 (perfectibilité)」への懐疑について、2) ジャンルとしてのユートピア文学の創造面での閉塞性について、これら二つの観点から考察することになる。考察の手がかりは上記のコント「ユルリュビエール国の偉大なるマニファファ、ユルリュブル、あるいは自己完成能力」(以下「ユルリュブル」と略)と、その続編「学問島のパタゴニア人たちのアルシカン、レヴィアタン・ル・ロン、あるいはユルリュブルの続編となる自己完成能力」(以下「レヴィアタン・ル・ロン」と略)を中心³⁾

2) Nodier, *Contes*, Editon de Pierre-Georges Castex, Paris, Garnier, 1961. 本論校では、ノディエのコントに関してはこのカステクス版に基づく。周知のごとく、「dériseur sensé」という表現は、ノディエ本人が1836年の「トリダス=ナフェ=テオプロム・ド・カウチューーによる、風変わりな産業的なパラゲ=ルーの旅」のなかで使用している。

3) 「トリダス=ナフェ=テオプロム・ド・カウチューーによる、風変わりな産業的なパラゲ=ルーの

とする。そして、それらのコントと内容が連動する1830年代前半に書かれた評論群から「来るべき人類の終焉について」（1831）、「人間の転生と復活について」（1832）、「人間の自己完成能力と印刷の文明への影響について」（1833）なども射程に入れて考える。

まず、コントを一瞥しておく。

「ユルリュブル」（1833年8月）は、哲学者のベルニケとユルリュビエール国のサルタン、マニファファとの対話で構成されている。ベルニケは語りの時から1万年以上も前のパリに生きていた。そこは1833年のパリで、その時代「自己完成能力（perfectibilité）」の世界的なプロパガンダがおこなわれていたという。「もし完璧な人間を手に入れる、あるいはそのような人間を製造するという方法を前もって見つけていないとすると、完璧な社会（une société parfaite）を創ることはかなり困難」⁴⁾になるはずだ。だから完全な人間を探しに行く、というのである。完全な人間は、4000年前に、ズロトクトロ・シャーによって製造されていたらしいが、しかしバクトリアを飲みこんだ地震によって、その製造方法もシャーも失われてしまった。そして、バクトリアが飲みこまれてしまった地中にまでも探索の手を広げるといふ決意で、ベルニケは12人の学者からなる探索隊を組織し出発する。ベルニケたちは「プログレシフ」という名の艦船に乗り込むが艦船のボイラーが爆発、ベルニケは爆発のあおりで空中高く放り出され、とある島に落下する。墜落した島では島民が気球の出発を祝う祭りを催している最中であり、ベルニケ一行は運良くその気球に乗り込むことができた。「安全確実」という名の蒸気気球ではあったが、隕石が降り注ぎ気球が危うくなった。ランチに移ることができたものの、ついには広い沼地に落下してしまった。そこはパタゴニアの島で哲学者の島だった。沼

旅」については本論校では扱わず、別稿を期したい。このコントが前作から3年を経て書かれていること、主人公が前作の二つのコントと同一ではないこと、また前作がベルニケとマニファファとの対話で物語が進行しているのに対してこのコントはそうではないこと、これらの点を考慮して三つのコントを同じ水準で扱うことはできないからだ。

4) Nodier, *Contes*, pp.402-403.

地から救出されると、歓呼の声を浴びながらベルニケは最高長老会議の宮殿まで連れて行かれ、そこで演説をするはめになる。大喝采を浴びた彼は狼狽え、飲み物を勧められるが手違いで「永遠の眠りの水薬」を呑んでしまい眠りに陥る。

続く「レヴィアタン・ル・ロン」(1833年11月)では、ベルニケはパタゴニア王、レヴィアタン・ル・ロンから依頼を受け、王が苦しんでいたひょうそう(急性化膿炎症)を治療する。王を病気から解放した報酬としてベルニケはパリに戻る許しを得る。パリは隕石によって廃墟となったが、今ではその場所にユルリュビエール国の首都が建っているという。ベルニケは大砲の弾に付けられた椅子に座って宇宙空間に飛び出し、星間を飛翔して地球にまい戻る。まどろんでいたマニファファが目覚めると、自分の寵姫がベルニケの腕に抱かれているのを発見し、ベルニケは信用を失う。彼は底なし井戸に逃げ込み、地底の中心で完璧な人間を発見することになる。

「ズロクトロ・シャー」はノディエの生前中未発表であった原稿であり、1961年にカステクスによって公表された。ここでは前作のコントとの関連性で、参考程度にとどめて報告しておく。「ズロクトロ・シャー」では別の語り手が現れ、地中を長く歩いていると巨大な門に辿り着き、バベルの塔の門番をしていたという門番と話すことになる。その男はこれから世界会議で完璧な人間が見られるという。4万人を下るまいと思われるほどの人がそこに集まり、議長が挨拶をする。そこで、ベルニケによって発見された完璧なる人間の報告が行われる。ベルニケによると、地中深いところで地下墓所を発見し、そこには墓標の短石柱があり、そこに「青白い小さな人物像を発見した。それは腰が曲がり、皺だらけで、しなびており、貧弱で、萎縮して」⁵⁾いた。その人物像はベルニケに「生命の妙薬」を自分にかけてくれるように頼む。ベルニケがそのようにすると、燃え上がり、その火によって人物像は元気を取り戻す。「蘇生」した人物像は「私はゾロアスタである」⁶⁾、すなわち完璧な人間を製造する者であると宣言する。

5) Nodier, *Contes*, p.448.

6) Nodier, *Contes*, p.449.

これら3編のコトのうち、最初の2作は哲学者のベルニケがユルリュビエール国のサルタン、マニファファと対話を交わすことで物語が展開する。ベルニケが語るのは荒唐無稽な旅の出来事であり、それを聞きながらマニファファは散漫な調子で質問する。二人の繰り広げる軽妙でアイロニーに富んだ会話が物語を進行させていくが、本筋から脱線し、その場その場でのやりとりのちぐはぐさがコトの特徴となっている。1830年にノディエが発表した異色作『ボヘミア王とその七つの城』と同じく、ダニエル・サンシュのいう「レシ・エクサントリック (récit excentrique)」と同じ創作的特徴を備えているように見える。

I. *perfectibilité* の問題性を巡って

注目すべきはタイトルに置かれた «*perfectibilité*» だ。「ユルリュブル」とその続編の「レヴィアタン・ル・ロン」には、タイトル後半部に「自己完成能力 (*perfectibilité*)」⁷⁾ という語が置かれている。タイトル前半の胡散臭い人物名と、それに並置されている「自己完成能力」という哲学的議論のテーマとの組み合わせが、読者に違和感を抱かせる。ここで見られるパラテキストの機能は、読者の解釈に誘導的な働きかけをすることにある。つまり、後半の哲学的議論の暗示は前半部の奇妙な固有名詞によって混ぜ返され、茶化される。こうして、これらのコトはタイトルからしてすでに諷刺性を強く暗示している。

語り手であり主人公でもあるベルニケは、自分が1830年代のパリにいた時に「自己完成能力」のプロパガンダ (*une propagande universelle de la perfectibilité*) が大流行していたと語る。彼は自らを「自己完成能力の知的プロパガンダの代表である」⁸⁾ と言い、「完全なる人間 (*homme parfait*)」を求めて探求の旅に出る。

フランスにおいて «*perfectibilité*» という語と概念が定着し始めるのは1750年

7) «*perfectibilité*» の訳語としては「自己改善能力」「完全性」「完成の可能性」などの語が当てられるが、本論考では「自己完成能力」という訳語を使用する。

8) Nodier, *Contes*, p.423.

代であり⁹⁾、ルソーが『人間不平等起源論（1755）』のなかで提起した概念と問題性が決定的役割を果たしている。ルソーの著作が出版されるや、すぐさまこの語を巡りフランスの思想界に「自己完成能力」論争とよばれる論争が巻き起こる¹⁰⁾。そしてほぼ80年間にわたり議論が展開されていくことになる。青年期のノディエに影響を与えた作家たちも、例えばコンドルセ、スタール夫人、コンスタンなどもこの論争に少なからず関与している。それゆえ、フランスの思想界における「自己完成能力」論争の展開を考えるなら、思想的バイアスを強く意識してコントのタイトルが選ばれたであろうと推測される。そうだとすれば、これまでのノディエ研究ではこの点に関してじゅうぶん議論されてきたとはいいがたい。例えばレイモン・トゥルソンはこの語の重要性について語ることはなかったし、フランソワーズ・シルヴォは「チュルゴーとコンドルセとともに誕生してきた自己完成能力の概念」をノディエが批判していたと述べるに留まっている¹¹⁾。また、ポール・ベニシュはノディエの使う「自己完成能力」を「進歩」とほぼ同義に扱う¹²⁾。しかし、ノディエが«perfectibilité»を使用するのは、「進歩（progrès）」では置き換えられない、「perfectibilité」という語と概念に特有の意味の広がり意識していたからではなかったか。

もともと«perfectibilité»は«perfectible»「改善され、さらに良くなり、さらに完璧になりうる」¹³⁾という意味の形容詞から派生した実詞で、「完全な（parfait）」

9) Voir le *Dictionnaire culturel en langue française*, Paris, Le Robert, 2005.

10) Florence Lotterie, «L'année 1800 - Perfectibilité, progrès et révolution dans *De la littérature* de Mme de Staël», *Romantisme*, No.108, 2000, pp. 9-22.

11) Voir Raymond Trousson, «Charles Nodier et le voyage imaginaire», *Francofonia*, Universidad de Cádiz: Servicio de Publicaciones, No.2, 1993, pp.197-211; «Charles Nodier et le voyage philosophique», *Viaggi in Utopia*, sous la direction de Raffaella Baccolini, Vita Fortunati, Nadia Minerva, Ravenna, Longo Editore, 1993, pp.175-183; Françoise Sylvos, «Satire et utopie dans 'Le cycle du Dériseur sensé' de Nodier», *Studi Francesi*, No.146, mai-août 2005, pp. 257-271.

12) Voir Paul Bénichou, *L'école du désenchantement*, Paris, Gallimard, 1992, p.53.

13) *Dictionnaire culturel en langue française*, T. III, sous la direction d'Alain Rey, Paris, Le Robert, 2005, p.1563.

という語と同じラテン語の語源 «perfectum» に由来する。「perfectionner」、
«perfectonnement»とも類縁関係にある。これら一連の語彙は、十八世紀中葉以
降の啓蒙主義の浸透とともに進歩の概念や文明を語る文脈で主要なキーワードと
なっていく。「perfectibilité」の起源と意味の広がりについては諸説あるものの、
思想史的な視点からすると、前述したようにルソーによって与えられた定義に依拠
しながら議論されるのが一般的となっている¹⁴⁾。

ルソーはこの語を導入するにあたり、まず貧富の差など社会的・政治的不平等が
なぜ生まれるのかと問い、それを分析するために原初的な段階にある野生人を想定
する。人間と動物とを分かち最大の特徴は何か、彼はそれを、人間が自由な行為者
であり、人間には «perfectibilité」の能力が備わっていることで説明する。この語
を定義してルソーは、「環境の力を借りて、次々とあらゆる能力を発展させてゆく
力であり、この能力は種としての人間にも、個体としての人間にも存在している」¹⁵⁾
という。この自己変革の能力によって、人間は自分と自然の間に不調和があれば周
圍の状況を改良するために自己の能力を発達させていく。「自由」「自然法」「情熱」
などととも『人間不平等起源論』の中心概念の一つである。

ところで、ルソーは «perfectibilité」の本質をどこに見ているのだろうか。それ
は «perfectibilité」が「特異な、そして無制限な能力」であり、「人間のすべての
不幸の源泉」であって、「平和で無辜なままに過ごしていた原初の状態から人間を
ひきずりだすもの」であるという点だ。「知識の光と誤謬」と、「悪徳と美徳」とを
出現させる原因ともなり、十全に個人の能力を発展させることもあれば、逆に動物
以下に転落させてしまう可能性をもった能力である。この «perfectibilité」 「自己
完成 (改善) 能力」と自由が、「人間を自己と自然を支配する暴君」¹⁶⁾ にさせてしまっ
たというのである。人間の美徳の根源と同じほどに悪徳の根源ともなる両義的な価

14) Voir Bertrand Binoche, «Perfection, perfectibilité, perfectionnement», *L'homme perfectible*, sous la direction de Bertrand Binoche, Seyssel, Champ Vallon, 2004, p.9 sq.

15) ルソー『人間不平等起源論』中山元訳、光文社、2008 (2013), p.75。

16) 前掲書、p.75。

値が「自己完成能力」には備わっている、それがルソーの主張だ。

しかし時代に支配的な精神は、そのような「自己完成能力」の両義的価値に拘泥することなく、人間の能力が永遠の進化を遂げるという思想に捉えられていた。先に挙げたコンドルセの『人間精神進歩史』の「人間精神の未来の進歩」のなかで、作者は科学の進歩と教育技術の進歩の相乗効果が人類を完成に導き、人間の完成の可能性は無限であると述べ、楽天的に未来を描いてみせる。コンスタンもまた、人間と人類の改善を信じるという点では同じ路線である。

『アドルフ』の著者は、1829年に「人類の自己完成能力について (De la perfectibilité de l'espèce humaine)」を著し、「自己完成能力」論争に彼なりの決着をつける。ノディエがコンスタンのこの評論を読んでいたかどうかは不明だが、コンスタンに対して若い頃から信頼と尊敬を寄せていたノディエである。また、ここでわれわれが扱っているコントが公表される以前にコンスタンの評論が出版されていることから考えても、ノディエがコンスタンの評論を知っていたと推測することはあながち間違っていないだろう。この評論の目的は「自己完成能力」を巡る一連の問題を論証することであり、そのためコンスタンは、「人間のなかには自己完成能力に向かう傾向があるかどうか、この傾向の原因は何か、その本質はいかなるものか、自己完成能力の傾向には限界があるのか、それとも限界はないのか、そしてその傾向の結果を遅らせたり、それを邪魔する障害とは何か」といった問いを設定する。人間の感覚と観念が人間に与える影響を比較することから論を起し、その影響の違いに「自己完成能力」の解決の鍵があると彼は推測する¹⁷⁾。人間はある観念のために現在の苦痛を耐え忍ぶことができる。それは未来のために現在を犠牲にすることであり、言い換えれば感覚に対する観念の優位である。それが人間を自らの主人とし、威厳、休息、幸福の根源である精神的独立を保ち続けさせるのだと言う¹⁸⁾。感覚は改善されることはないが観念は改良される。観念によって支配さ

17) Benjamin Constant, «De la perfectibilité de l'espèce humaine», *De la perfectibilité de l'Espèce humaine*, Introduction et notes de Pierre Deguise, Lausanne, L'Age d'Homme, 1967, p.45. (初出 *Mélanges de littérature et de politique*, Paris, Pichon et Didier, 1829.)

18) *Ibid.*, p.50

れることで人は完璧状態に近づき、それが個人から人類という種全体に広がっていくと推論する。人間の「自己完成能力」は内面世界でゆっくりと時間をかけて働きかけ、既知の真実から未知の真実へと人間を導く。それと同じように、外的世界においても発見から新たな発見に導かれ、火薬、羅針盤、印刷術を手に入れながら人間を物質世界の支配者にしている。こうして、果敢のない前進によって幸福と啓蒙という点で何ものかを獲得していく。「自己完成能力」は人間の能力の無限の発達可能性と前進と理解され、その能力によって人間社会が改善されていくと考える。

一方のノディエはまったく異なる理解を示している。彼は「自己完成能力」に対して若い頃から懐疑の眼差しを向けていた。1803年、23歳のとき、「修道院回廊での瞑想」のなかですでに、「私たちのあらゆる逸脱行為、すべての過ちが由来している自己完成能力への偏愛 (la manie de la perfectibilité)」¹⁹⁾と書いている。それは人間の本性が墮落や悪徳へと後退するという確信を抱いていたからだ。そして、1830年11月、『パリ評論』に発表した「人間の自己完成能力と印刷の文明への影響について (De la perfectibilité de l'homme et de l'influence de l'imprimerie sur la civilisation)」と題された評論のなかで自らの考えを詳言する。ノディエによると、「人間が完璧になり得る (perfectible)、そのように言うことは人間が自らの本質を変えることができるということを前提としている。それはバラにヤナギハッカになるよう、またパイナップルにポプラの木になるよう求めるのに等しい」²⁰⁾。文明において完成能力が見てとれる唯一の分野は機械を使う仕事や手仕事であるという。ノディエ自身は「進歩」を嫌ってはいても²¹⁾、技術や産業分野での革新を認めないわけではなかった。他方「人間の知性に関する精神作用は、人

19) Nodier, *Les méditations du cloître, Œuvres complètes II*, Genève, Slatkine Reprints, p. 121.

20) Nodier, «De la perfectibilité de l'homme et de l'influence de l'imprimerie sur la civilisation», *Rêveries*, Préface d'Hubert Juin, Paris, Plasma, 1979, p.157. (初出 *Revue de Paris*, nov. 1830.)

21) ノディエの娘マリは『回想録』のなかで、「進歩や進歩の観念を含むすべてのものは、それが相互教育であれ、ガス照明であれ、鉄道であれ、新語のなかで最も害のないものにいたるまで、彼を戦闘態勢にし、いつでもそれを攻撃する状態にしていた」、と述べている。(Marie Mennessier-Nodier, *Charles Nodier, Episodes et souvenirs: 1780-1844*, Paris, Didier, p.29.)

間の器官と同じですすでに出来上がってしまっている。人間が人間である限り、もうこれ以上先には進まないだろう」²²⁾と述べる。本性に根ざした傾向は不変で改善できないのだから、人間の営みも同じ結果であろう。「思弁的学問は変質したことがなかった。実証科学はその本質からして不動である。事実に基づく知識は増えはするが、完璧になるわけではない」²³⁾。そして、「来るべき社会の絶対確実な兆し、それは滅亡してしまった社会の歴史のなかにまるまるある」²⁴⁾、と主張するのである。

「進歩」という語は「それほどでもない状態からさらに良い状態へと漸次的に変化していくこと」であり、肯定的価値判断が含まれている²⁵⁾。そこには社会や技術や制度などの改善、前進への意味が暗示されている。しかし、「自己完成能力」はノディエにとってみれば愚かなことでしかない。人間の本質は完成されてしまっている以上、改善を望むことはできない。コントのなかで、ベルニケはマニファファから「完全なる人間 (homme parfait)」とは何を意味するのかと問われ、こう答えている。

器官が完璧であること、と慎ましくベルニケは答えた。神はその奇跡の手によって自らの被造物の間にあれほど限らない能力を広めておきながら、われわれの種に関しては、意地の悪い物惜しみから神はわれわれの種の能力を鈍感で惨めな五感を使うことに制限してしまわれた。しかもさらにたちが悪いことに、愚かなことをすること以外、何の役にも立たない知的感覚もその五感にくっつけてしまわれた。そのような能力を補うことなのです²⁶⁾。

「自己完成能力」の探求がいかに馬鹿げたことか、ベルニケの答えは皮肉たっ

22) Nodier, «De la perfectibilité de l'homme», pp.157-158.

23) *Ibid.*, p.158.

24) *Ibid.*, p.162.

25) *Dictionnaire culturel en langue française*, T. III, p.2113.

26) Nodier, *Contes*, p.403

ぶりである。そこには、人間の墮落への性向に対する深い失望感が透けて見える。「perfectibilité」を語る時、ノディエはルソーに言及することはないが、ルソーのペシミズムを共有しているといえる。

ノディエが人間の進歩に対してなぜこれほどまでに厭世的な思想を醸成させたのか、その決定的な答えはない。しかし少なくとも、フランス革命から1830年代に至るまでの彼を取り巻く政治と社会の大変革を、最大の要因の一つとして挙げることはできるだろう。ノディエはその生涯に、1792年の第一共和制成立から総裁政府、執政政府を経て、第一帝政、二度の復古王政、七月王政と、政治体制のめまぐるしい変化を経験している。それは時には、生命を危険に晒す状況に直面する運命を生き延びることであった。例えば、イリリア諸州の官報『テレグラフ・オフィシエル』の編集長としてライバッハに滞在していた時、オーストリア軍がイリリア諸州に侵攻してきたために、一家は命からがらフランスに逃げ帰ったこともあった。政治的混乱によってもたらされる社会構造、あるいは社会システムの根本的な変革が、彼とその家族を翻弄したのだった。

しかし、動乱期にあっても、人びとの間には、理性によって新たな人間を生み出し、揺るぎない幸福と完璧な社会へとさらに進歩するという期待が浸透していった。そのような時代の精神は憲法に如実に反映されている。別名「ジャコバン憲法」とよばれる1793年7月24日憲法は革命後に採択された憲法で最も民主的な内容が盛り込まれた憲法であるが、その第22条には「社会はそのあらゆる権力を用いて民衆の理性が進歩（*progrès de la raison publique*）するよう促し、すべての市民に教育が行き渡るようにしなければならない」と記されている。際限のない進歩による理想的社会の到来を楽天的に描いたコンドルセの『人間精神進歩史』が獄中で書かれたのも、まさにこの1793年だった。

この時期、ブザンソンで過ごしていた多感な少年は一種異様な雰囲気の中になにがあったのではなかったか。若きノディエは、テルミドール10日（1794年7月28日）、サント＝マドレーヌ教会でジョゼフ・バラとアグリコラ・ヴィアラを讃えるジャコバンの着想を盛りこんだ演説を行い、喝采を得ていた。恐怖政治の時代、この地で

理性や道徳の進歩の名においてジャコバン的共和制の精神に反する人間を法の力を行使してギロチンへと送り込んでいたのは、地方の裁判所長官であった他ならぬノディエの父アントワヌ＝メルキオールであった。彼は処刑の様子を息子に見せることが息子に対する教育であると信じて疑わなかった。人の生命を左右できる権力とそれを合理化する進歩の観念、死への恐怖と父への愛情の相克、見せ物化された斬首の残虐性とその光景に集団的熱狂状態を呈する群衆の祝祭性、それらにノディエの感受性と想像力は傷めつけられた²⁷⁾。そのような革命時の心的外傷は成人してからも消えることはなかったのだろう、作品のなかに人間や文明への不信感を強く滲ませた文を数多く残している。進歩の観念を信じ、完璧になる文明を夢想することがいかに不遜で危ういことか、『エレーヌ＝ジレ』の最後に語り手がそれを語っている。

あなたがたは処刑台に対しては何も革命を起こさなかった。なぜなら、あなたがたの野蛮人の革命のなかで、人間的感情が優先されたことも、人間的感動が打ち震えたこともいっさいなかったからだ。なのにあなたがたは、自分たちの知性について語っている。そして、何はばかることなく、自らを完璧となった文明 (une civilisation perfectionnée) の手本と名乗っているのだ。私はあえてお尋ねしよう。どこにあるのか、みなさんの文明とやらは²⁸⁾。

さらに、ここでわれわれが組上に載せているコトは、1830年代の社会思想的背景を意識していることも忘れてはなるまい。1829年、サン＝シモン主義運動を解説した『サン＝シモンの学説の説明 (1829/1830)』が出版され、同年サン＝シモン教会が成立する。この頃から、サン＝シモン主義運動はある種の「社会主義」運動として展開され、エリート層に受け入れられる。ノディエのこれらのコトを

27) 斬首の光景や切り離された首がしゃべったり動くという繰り返し現れるモチーフがそれを物語っている。

28) Nodier, *Contes*, p.347.

掲載した『パリ評論』には「サン＝シモンの政治・宗教的教義について」と題された論文が寄せられ、「不平等の源泉は枯渇している。特権は経験されることなく、エゴイズムは破壊され、社会はその成員すべてが一つの観念、一つの行為、一つの欲求を抱くだけである。それは進歩である」²⁹⁾、と理想的社会の到来を予言する。「progrès」から派生した動詞「progresser」が使用されはじめるのが1834年³⁰⁾、まさにノディエがこれらのコントを執筆した時期と重なるのは偶然ではない。

一方、フーリエの思想は、弟子たちによって一般向けの要約『産業的・共同社会的な新世界』が1829年に出版され、雑誌『ファランステールまたは産業改革』も1833年に創刊される。このような思想的文脈を背景に、「社会主義」(1831)、「社会主義者」(1833)という新語が生まれ、ユートピアという語も政治色化を進めていく。ユートピアという語の意味論の変遷を研究したハンス＝ギュンター・フンケはこう指摘する。「十八世紀が文学的ユートピアの黄金時代だとすれば、十九世紀はまさしくユートピア概念の黄金時代であり、曖昧な政治的概念から、政治社会的言語の根本的な概念としての地位の方に進化する。それが、30・40年代には未来に向けた政治システム概念である『社会主義』『共産主義』と同意語となる」³¹⁾。このようにユートピア的イデオロギーが実際の社会改革に大きな影響を及ぼし始めている状況で、ノディエは「人間転生論と復活について」を書き、サン＝シモン、フーリエ、バランシュの思想に批判的な姿勢を示す。

ノディエがこれらの思想家を批判するのは、社会や政治制度は人間の手によって計画的に改造でき、完璧になり得るといった認識に強い懐疑と不信の念を抱いているからだ。トーマス・モアの『ユートピア』以降、ユートピア文学のなかでさまざまな表現をとりながら綿々と受け継がれてきた古典的ユートピア文学は、荒唐無稽な社会改革の夢想を展開しただけではない。時の政治や社会制度への批判、反抗を表

29) «De la doctrine politique et religieuse de Saint-Simon», *Revue de Paris*, Tome 17, 1830, p.169.

30) *Le Nouveau Petit Robert*, 2010.

31) Hans-Günter Funke, «L'évolution sémantique de la notion d'utopie en France», *De l'Utopie à l'Uchronie, Formes, Significations, Fonctions*, édités par Hinrich Hudde et Peter Kuon, Tübingen, Gunter Narr Verlag, 1988, p.28.

現しながら、社会や政治システムを合理的、かつ計画的に改造するための仮説も提案している。しかしノディエの眼からすれば、「自己完成能力」を達成した状態である「完成された人間」、つまり能力が最大限改良された到達点にある人間など想定できない。したがって、どうして将来の社会の完成に期待できるのか、というのである。種としての人間に対する皮肉には、ノディエの人間の本質に対する強い悲観主義が滲み出る。

社会は悪循環である、それも極めて悪いものだ。社会はその循環から抜け出すことはできない。それは、社会が自らの組織のなかに、自分自身を超越するような離心的(excentrique)な能力を持ってはいないからだ³²⁾。

あなたがたが近代社会の漸進的な歩みとよぶもののなかに、野蛮への回帰の歯止めとなるものはいっさいない。あなたがたはかつてそうであったように野蛮になるだろう。以前よりいっそう野蛮になるだろう。そして、すでに野蛮であると言ってもいいほどだ。ただ、あなたがたの野蛮は他の野蛮とは一点において異なるだろう。なぜなら、あなたがたの野蛮は文明と自己完成能力(perfectibilité)の名のもとに君臨し始めるからだ。つまり、お笑い草によって君臨しようというのだ³³⁾。

種としての人間に対するこのように絶望的なまでの悲観主義は、昆虫学への関心によって補償されているのかもしれない。ノディエは幼少の頃から自然科学に親しみ、最初の著作は昆虫の触角に関する論文であった。文学と自然科学との間で将来の進路に心が揺れ動いたことさえあった。幻想文学者ノディエの影に隠れて目立たないが、彼は生涯にわたって昆虫の収集に強い執着心を抱き、その自然観察の眼には生物学的な進化の過程への関心が絶えず働きかけていた。そう考えるなら、「自己完成能力」を昆虫学の世界に位置づけるという考えは不思議なことでは

32) Nodier, «De la perfectibilité de l'homme», p. 161.

33) *Ibid.*, pp.169-170.

ない。1830年以降、ノディエの昆虫学への関心が人類の終焉以後の地上のあり方を想像する彼の想像力に影響を与えてくる。「昆虫は世界の王である。そして、もし創造の働きが賢明であるなら、その働きが向かう先はこの昆虫という種の完全性(perfectionnement)である」³⁴⁾と言う。

ノディエはこの地上における人間の進化の限界を主張し、完璧になりうるという不遜な考えを排する。人間とその社会、種としての人類への絶望的な眼差しは、「進歩」ではなく「自己完成能力」という語を選択させ、人間の本性に生得的に備った墮落への傾向を強く表現するために用いられたのである。

II. ユートピア文学の限界と不毛性

ここまで、ノディエが人間の「自己完成能力」の不信と社会への懐疑を深め、いかにユートピア世界を構築するためのイデオロギー批判に向かうのかを検討してきた。しかしまた同時に、ノディエはユートピア思想と連動するユートピア文学の表現にも批判の眼差しを向けてもいるのだ。ユートピア文学には固有の美学があり、旅のモチーフ、語りの特徴、構成がある。それに依拠しながらユートピア文学の伝統は築かれてきた。そのようなユートピア文学がジャンルとしてもつ創造面での「定石」を、ノディエは揶揄の対象とする。

ユートピア文学作品は図式的に言ってしまえば、冒険心に富んだ主人公が旅に出るが、避けられない難破に遭遇することになる。俗界との接触を避けるかのような隔絶した島に漂着し、そこで「完璧な」幸福を実現している人びとに出会い、理想的な政治・社会制度、ユートピア的価値観、科学技術の驚異的進歩などを見聞きする。そしてそこでの体験や知識を故国に持ち帰る... そのように定式化されるだろう。旅の目的は理想の社会や幸福な生活を探求することであり、遭難や苦難は理想

34) «Lettres à Julie sur l'entomologie, par M. Mulsant (Premier article)», *Le Temps*, 26 / fev. /1832 (*Feuilletons du «Temps»*, Editions de Jacques-Remi Dahan, Paris, Classiques Garnier, p.212).

郷に至るイニシエーションとしての価値をもつ。隔絶した島という地理的条件はユートピアが外部世界からの退廃を免れるための環境となり、政治・社会制度は個人の幸福ではなく集団の幸福のために整備される。近代のユートピア文学はトーマス・モアの『ユートピア』を原型にし、さまざまなヴァリエーションを産んできたが、それでも探求の旅、遭難、理想的社会を実現した島などは、カルメリナ・インプロシオの指摘する「ユートピア文学のパラディグム」³⁵⁾となっている。このような古典的ユートピア文学のモチーフを取り上げ、ノディエはコントでその創作原理が閉じられていること、いわばその不毛性を暗示する。それをユートピア的旅における空間移動と難破、ユートピア世界に参入する主人公の知覚、孤絶した島という三つの点から見てみよう。

まず、ユートピア文学のジャンルを同定する指標である空間的トポスである。コントでは、その空間的トポスのパターン化した類似性が間テキストの仕掛けによって浮き彫りにされる。気球による垂直移動、大砲を使っての宇宙空間の飛翔、地下世界への下降移動など、ベルニケは自由自在に時空を移動する。それらの時空の移動は、サモサタのルキアノス『本当の話』、シラノ・ド・ベルジュラック『別世界または日月両世界諸国諸帝国』、レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ『飛行人間による南方諸島の発見』を読者に思い起こさせる。宇宙空間はヴォルテールの『マイクロメガ』が想起されるし、レチフの『イコザメロン』との関連を指摘するレジ・メサック³⁶⁾などの研究者もいる。このように、間テキスト性が読者に「文学の記憶」を発動させる仕掛けとなり、ユートピア的理想世界に至るまでの手続きとしての空想的旅がいかに「定石」を踏襲しているか、このジャンルにおける創造的な閉塞性を印象づけるのである。

ユートピア文学における旅は、より優れた社会の発見に導かれるための手続きで

35) Carmelina Imbroscio, Préface au *Requiem pour l'utopie?*, Pise, Libreria Goliatdica, 1986, p. 7.

36) Régis Messac, «La Négation du progrès dans la littérature moderne», *Les premières utopies*, Paris, Ex Nihilo, 1936/37(2008), p.103 sq.

あり、真実に到達するために主人公が乗り越えなくてはならない試練である。ところがそのようなユートピアの旅も、ノディエのコトの場合は単なる偶然の事故の重なりであるに過ぎない。紆余曲折を経た後に旅の終点で見出すものは、現在と同じ程度の文明か、さもなければそれより後退していると思われる文明なのだ。ユートピア世界に行き着くためになされた空間的移動とそれに伴う苦難や遭難は、イニシエーションとしての意味を失い、偶然の出来事が生のママむき出しになっている。こうして、ユートピア文学の間テキストの集積が、ユートピアにおける旅の不毛性へと読者の認識を導くことになる。

次に、主人公の知覚の不安定さに注目したい。ユートピア文学のジャンルでは、主人公がいかに行動したかというより、主人公が何を見たのかに重きが置かれる。レイモン・トゥルソンは初期ユートピア文学ないしは古典的ユートピア文学に特徴的な傾向を挙げ、「ユートピアの目的はそこを訪問する者にそのユートピアの国を見せることにある。その結果、行動やある種の筋だてが手薄になる。…ユートピアにあっては、語りはまさしく描写によって排除される」³⁷⁾、と描写への偏りを強調する。言い換えれば、語りにおける時間的展開より、描写における空間的広がりの方が前景になる。ユートピア文学では「主人公の冒険はもっぱら主人公を理想の国に導いていくことに役立つだけであり、理想の国での主人公の存在はその国を描写する以外に有用性はない」³⁸⁾。この場合肝心なことは、主人公が合理的で秩序だったユートピア世界の体系的描写ができる報告者として、優れた資質を備えているかどうかだ。だが、ノディエのコトの主人公はそのような報告者としての資質を欠いている。それは、主人公の空間の知覚の不安定さに原因がある。

文明国であるというパタゴニアに墜落する時、ベルニケは頭から島に向けて落下していく。その最中に、眼下に「花々と果物類でおおわれたエリユシオンのような植物相が見せるあらゆる驚異」が広がっている。ベルニケは枝から枝へと落下して

37) Raymond Trousson, «Utopie et roman: l'apparition du "héros"», Albert Mingelgrün / Adolphe Nysenholc, *Ecritures à Maurice-Jean Lefebvre*, Bruxelles, Editions de l'Université de Bruxelles, 1983, p.237.

38) *Ibid.*, p.238.

いきながら、次のように島の様子を描写する。

まさしくそれらは黄金の実をつけたオレンジの木々、房をたなびかせたバナナの木々、赤く染まった房をつけた葡萄の木々で、その豊かな枝を桑や楡の枝に絡みつかせていました。おびただしい数のルビー色の実がたわわに実り、それらがそよぎ、その重みでたわんでいるサクランボの木々が、そよ風がしなやかな小枝にあたってゆったりと揺れ動いておりました。漆黒のしょう果をもった月桂樹なのでしょう、香しい匂いを放つ飾り燭台のようなアカシアなのでしょう、うっとりとするような香りが、空气中でスマイル、カーネーション、ヘリオトロープ、月下香の香りとともに混ざり合っていました。草原のみずみずしい緑を、いたるところで水晶と銀の流れが立ち切っていて、これらの花々が優雅な縁取り刺繍のように飾っていたのです³⁹⁾。

落下する速度のなかで、植物の種類、色、さらに香りの印象までもが報告されている。超低速のスローモーション・カメラが捉えるように密度の高い描写だ。

また、これとは反対の例もある。病気の君主レヴィアタン・ル・ロンの治療に成功し、その功績を認められたベルニケは、報酬としてパリに戻してもらえることになる。ベルニケは星間を飛翔して地球に戻ることになるが、その方法は大砲の弾に付けられた椅子に座って宇宙空間に飛び出すというものだった。

私は惑星の間に掛けられた800もの吊り橋を眺めながら名状しがたい喜びを味わっていました。それらの吊り橋は地平線上で見事なアーチを描いて交差したり交差したりして、戦勝記念碑、オベリスク、彫像ですっかりでおおいつくされていました。彫像はコンコルドの橋の彫像と少なくとも同じほど良き趣味と美しい釣り合いを見せていました⁴⁰⁾。

39) Nodier, *Contes*, p.406.

40) Nodier, *Contes*, p.433.

高速度で宇宙空間を飛びながら彫像の印象まで述べる。ここでの知覚は、凹レンズと凸レンズから得られる映像が同時に並び、部分と全体の関係が著しくアンバランスになっている。超低速度のスローモーションで捉えられた映像から、超高速度で移動するカメラで捉えられた映像まで、今日ならとりわけアニメーションで実現されるような空間知覚が見られる。極大と極小の知覚の並列、部分の拡大化と全体の不在によって、中心を欠く不安定な空間だ。古典的ユートピア一般によく見られる秩序だった社会組織や整然とした空間意識とは反対に、主観的で感覚的な描写が目立ち、空間・時間は延び縮みしている。ベルニケの特異な知覚によって、合理性、秩序だった体系性は解体されている。

三点目の孤絶した島の状況も文学的ユートピア世界とは正反対である。もともと「自己完成能力」は理性、知識、道徳といった知的・精神的能力の改善、拡大を予想させる。しかし哲学者たちが支配するこの文明国家では、「この奇妙な島が生命を持つものを一度も生み出したことがなかったが、それが島を文明にふさわしいようにしている」⁴¹⁾。食物や人造人間を製作する「哲学者で溢れる」この島では、哲学者たちが進歩への信仰を讃えている。「文明化された島」であるというパタゴニアでありながら、ごく単純な指にできた傷で人は苦しむ。医学の発展はその苦痛さえ和らげられない。パタゴニアの言語は、実はフランスのパトワ（地方語）であり、筆記方式はブストロフェドン（牛耕式）のような文字配列なだけであった。

このようにベルニケのユートピアの旅は発見とは無縁の旅であり、この空間・時間には発見すべきことが何もない。「なし得ることができたこと、それはなされてしまった。そして、なされたことはなされるであろう」⁴²⁾、というノディエの言葉どおりだ。何を目的の旅だったのか、その意味は絶えず逃れ、離れて行く。ベルニケの旅は寄り道の連続であり、周縁的要素を拡大することでノディエはジャンルとしてのユートピア文学を嘲笑する。

人間の能力の無限の発展を信ずる「自己完成能力」と進歩の観念への信頼を前提

41) Nodier, *Contes*, p.411.

42) Nodier, «De la perfectibilité de l'homme», p.161.

にするのでなければ、ユートピアで具現化される理想的な社会、幸福生活を想像することはできない。だが、ノディエはそのような前提さえ信じない。彼にとっては、完成されてしまった文明の行き着くところは人類の滅亡しかない。

社会は完璧性の状態に向かっていき、個人のありとあらゆる能力が可能な限り最も高度なレベルに達し、それらが合わさった結果から完璧性の状態が出現するだろう、しばらく前から人はそのように確信してきた。不幸をもたらす誤謬だ。馬鹿げているのに。社会の目的、それは能力と知性があまねく行き渡るような際限のない完璧性 (le perfectionnement général et illimité) ではない。なぜなら、そのような地点まで到達した社会は一日でさえ存続できないからだ⁴³⁾。

そのような人類の未来の極めて厭世的なヴィジョンを、ノディエはジャン＝パティスト・クザン・ド・グランヴィルの『最後の人間』⁴⁴⁾に見いだしていた。ノディエはクロフトのもとで秘書をしていた頃、グランヴィルのことを知り、この作品が忘れ去られてしまわないよう再版に強い執着をみせている。そして、序文を書くとともに『パリ評論』に論評も発表している。グランヴィルの作品は人類滅亡の最終段階を描く長編の叙事詩であり、ミシュレやユゴーなどに影響を与えている。今日では、SF ジャンルに分類されることも多く、この薄幸な牧師作家の名前を後世に伝える唯一の作品となっている。廢墟となった地球の姿、子孫を残すために最後の希望を託されたオメガールとシデリの絶望的な放浪、もはや避けられない人類滅亡の運命…、グランヴィルの作品は厭世的な人間観、終末論の世界観に彩られ、徹底したニヒリズムに貫かれている。

ノディエのコントはこのグランヴィルの作品とは対照的だ。深刻になることを避

43) Nodier, «Le Génie de la Révolution considéré dans l'éducation, ou Mémoires pour servir à l'histoire de l'instruction publique depuis 1789 jusqu'à nos jours», *Mélanges de littérature et de critique*, Tome I, Paris, Raymond, 1820, pp.83-84.

44) Jean-Baptiste Cousin de Grainville, *Le dernier homme*, publié par Charles Nodier, Paris, Ferra; Deterville, 2 vols., 1811.

け、嘲弄的・諷刺的であろうとした。そのために用いられたのがレトリックでいうアダユナトン (adynaton) だ。今ある世界を逆さまの世界として描くことで、徹底した諷刺となっている。深く暗い思いにとらわれている時、不器用に笑いを求めるように一本調子で過剰なアダユナトンの利用が見てとれる。そのような方法論の単調さが、むしろノディエのペシミズムの深さを物語っているように思われる。誇張された反対世界は、秩序だった社会・世界の像を結ぶことはなく、断片となった部分が立ち現れてくるにすぎない。このように、ユートピア世界のイデオロギーも、ユートピア探求の旅も、すべてがその空虚さを浮き彫りにしている。

III. 結び

こうしてノディエの複数のテキストを突き合わせて読むことで、創造原理としての«dériseur sensé»に特有の傾向が見えてくる。「sensé」(「分別ある」)という意味は、醒めた眼差しで社会や政治を見、距離を置くことだ。しかし同時に、「自己完成能力」やユートピア文学の閉塞的な創造性を冷笑し、諷刺するという醒めた精神 (désenchantement) は、社会にだけ向けられるのではない。その矛先は自分自身にも向けられている。奔流となって進んでいく歴史の歩みに一人抵抗したところで何になろう、その道化的愚かしさ、空虚さにノディエが気づかないはずはない。「dériseur sensé」は、結局、近代の文明社会に背を向けながらも、そこで表現者として活動을続けていくために拠り所とするノディエの世界把持の仕方だった。そしてそれは、神話や伝説や迷信というプリミティヴな民衆の世界によりいっそう深く沈潜していく原動力でもあった。

テキストと参考文献

テキスト

- Contes*, édition de Pierre-Georges Castex, Paris, Garnier, 1961.
Œuvres complètes, 12 vol., Paris, Renduel, 1832-1837(Genève, Slatkine Reprints, 1998).
Mélanges de Littérature et de Critique, 2 vol., Paris, Raymond, 1820.
Rêveries, Préface d'Hubert Juin, Paris, Plasma, 1979.

参考文献

- Allemand, R.-M., *L'utopie*, Paris, Ellipses, 2005.
Bénichou, P., *Le sacre de l'écrivain*, Paris, José Corti, 1973(Gallimard,1996)
——— *L'école du désenchantement*, Paris, Gallimard, 1992.
Lotterie, F., *Progrès et perfectibilité: un dilemme des Lumières françaises*, Oxford, Voltaire Foundation, University of Oxford, 2006.
Marouby, C., *Utopie et primitivisme*, Paris, Seuil, 1990.
Minski, A., *Le préromantisme*, Paris, Armand Colin, 1998.
Samoyault, T., *L'intertextualité*, Paris, Nathan, 2001.
Sangsue, D., *Le récit excentrique*, Paris, José Corti, 1987.
——— *La relation parodique*, Paris, José Corti, 2007.
Trousson, R., *D'Utopie et d'Utopistes*, Paris, Harmattan, 1998.
——— *Voyages aux pays de nulle part*, Bruxelles, Editions de l'Université de Bruxelles, 1999.
Zaragoza, G., *Charles Nodier, Le dériseur sensé*, Paris, Klincksieck, 1992.